

## 天衣無縫の恩師＝横井政人先生



横井先生近影  
(ご遺族ご提供)

大学には個性的な人物がいくらでもいます。なにしろ、専門家としての異能が求められ、他人と同じことを言えない立場の集団で、世の中を斜交いに見る癖というか、職業病というか、そんな変てこな人物が絶滅を免れる世にも稀な環境だからです。個性的、ユニーク、想定外の発言などなど、そうした意味で誰にも負けない大学人＝横井政人先生は、横綱級でした。なのに、

敵はゼロ、誰にも愛される・・・不思議な存在。一言で言うなら、天衣無縫の絶滅危惧種。花葉には、先生の武勇伝を書き尽くすスペースはないでしょう。なので、ここでは、あの世で待っている先生に叱られるのを覚悟で、私しか知りえなかった横井先生の素顔を少し書いてみます。

かつて、学位（博士号）は長年の研究のご褒美として授与されたものです（旧代）。しかし今では、研究者としての技能の証明、いわば運転免許証として授与されます（現代）。そのため、大学教員には学位が必須なのです。横井先生も私も、ともに京都大学の塚本洋太郎教授から学位を授かりましたが、その重みは全く違います。横井先生は旧代の最後、私は現代の最初、だったからです。横井先生は塚本先生の退官直前に学位を取得されました。当時、塚本研究室の助手だった私は、そのどさくさに紛れて頂いたのです。

横井先生の学位論文の最後の部分は、京都の私の下宿でタイプされたものです。昭和49年の初冬のはずです。まだワープロのなかった時代、生まれて初めての徹夜だったそうですが（きっと生涯一回）、朝になってもまだ打ち続けたい先生から、原稿を奪い取って製本所に駆け込み、辛うじて期日に間に合わせました。それは、先生と本格的な喧嘩をした唯一の記憶です。私も必死でした。なぜなら、横井先生の学位審査が遅れば、翌月に審査を予定している私は、はみ出してしまい、塚本先生に学位論文を提出する機会を永久に

失ってしまうからです。製本屋から戻ると、横井先生はすやすやとお休みでした。

千葉大学に戻ってからのことです。横井先生に論文原稿の校閲をお願いしていました。額に汗して書いた最初の原稿、それを開いてすぐ先生は「君には英語の遺伝子がないね」（ひどいでしょ！）。英語の良し悪しは、見た瞬間に分かる（ようになる）ものです。

この状態からスタートして、論文を書くたびに、これでもか、これでもかと、しつこく先生に迫りました。何はともあれ、驚馬でも次第に上達するもので、10年を経て先生に「もう見せなくていい。免許皆伝だ」（すごいでしょ！）と言われました。私は、横井先生から英語の免許皆伝を頂いた唯一人の教え子なのです。

免許皆伝を頂いた直後だったと思います。ある論文集を手にとって、無目的にページをくつっていると、一本の論文に目が留まりました。それは、すらすらと読みやすい、“あの”英語で満たされていました。一瞬、こんな所に書いたことがあったかな？と自分の記憶を疑ったほど、私の文体にそっくりでした。しかし、ちょっと読むと、私ではない、私が到達したいと願ってきた、あの男にしか書けない英語だったのです。学術論文にはまずない、流れ、響き、心の波長にシンクロして、いやおうなく振幅を高めていく・・・やはり横井先生の論文でした。すぐさま先生に電話して「先生の英語は、私の英語にそっくりですよ」と言うと「バカたれ」と一蹴。でも、先生も嬉しかったと思います。私は孫悟空。お釈迦様の掌中から飛び出すこともできないだけの無頼。でも、横井先生に師事できて、ここまで来られたのです。

学術論文というものは、受理される前に、匿名の（無粋な）校閲者によって、修正を強要されます。すると機械が書いたような無味乾燥の文体になってしまうのが常。ですから、残念なことに、横井先生の感性の証しは、校閲の厳しくない雑誌に、先生が一人で書いた論文（単著）に香るだけです。そして私の心に薫風として。

安藤 敏夫 拝（昭和44年卒）

## 横井先生ご自身が1977年に執筆された研究総括より抜粋

色素の研究を始めた大きな動機は前述のように栽植密度と品質の関係の研究を行っていたからであるが、その他にも大きな4つの理由があった。

その一つはその当時、浅山英一先生が東京大学理学部の故服部静夫先生の元に色素の勉強に行かれ花の研究室でいろいろの花でペーパークロマトグラフィーを行っておられ、花の色素が簡単に分析できることを初めて知り不思議なものと思った点である。二つ目はそのころ教育大学理学部の色素研究の第一人者故林孝三先生が園芸学部へ色素研究材料収集のため学生と浅山先生を訪れ、その時私がお供したことがあった点である。さらに翌年昭和36年(1961)に来られたときに、学生のなかに当時博士課程2年生であった現明治学院大学教授の斎藤規夫先生がおられ知り合った。その後、私が教育大学を訪れ色素分析の手ほどきと要点を教えてくださいいただいたのが重要な三つ目の動機になった。そうこうしているうちに主任教授であった小杉清先生から生態学はまとめにくいのでテーマを絞ったらといわれたのが4つ目の最大のきっかけになり思い切って上記のように観賞植物の色彩、色素というテーマに変えて絞り現在に至った。30年以上前の事であった。

はじめは簡単に考えていたテーマであったが、奥行きを感じ、しかも園芸的にも重要な課題であることがわかり研究を行ってきたが、まだまだ知りたいことが多数あるうちに定年を迎えてしまった。この10年間、特筆すべきは色素分析技術が急速の発展をみせ、以前では解決できなかった色素同定が正確に行えることになったことである。このような技術の急速の進歩は私の能力以上であったが幸いなことに明治学院大学化学教室の斎藤規夫先生の適切なご指導があり、私の予期以上の研究成果を挙げることができた。先生のお力がなければ、このように長期間の多数の研究ができなかったと思いここに同氏に衷心から感謝申し上げる。

さらに卒業論文リストに見られるように多くの学生の努力と協力の賜が私の今日の成果に繋がったことをとくに書き添えて心から感謝したい。とくに博士論文を書き上げた呂 廷森、嵯 世宝、御巫由紀、立澤文見諸氏の成果は大きい。また実験材料を提供された数多い方々にも末尾であるが感謝申し上げたい。

私が学会賞をいただいたころの成果は現在すでに色褪せて古典的になり役立つ点は多くはないが、当時まだ観賞植物の色彩問題が切実に取り上げられていなかったとき、観賞植物の花や葉などの色彩が将来、室内

外の環境美化に重要になり、また当時むずかしかった園芸品種の色素分析が新花色品種育成に絶対に必要になるという考えは間違いなかったと自分としては満足している。

## 略歴

昭和29年(1954) 千葉大学園芸学部園芸学科卒業  
昭和31年(1956) 京都大学大学院農学研究科修了  
千葉大学園芸学部教務職員  
昭和35年(1960) 千葉大学園芸学部助手  
昭和54年(1979) 千葉大学園芸学部助教授  
昭和56年(1981) 千葉大学園芸学部教授  
平成9年(1997) 定年退官、千葉大学名誉教授

## 蔵書について

横井先生の蔵書とポジフィルムに関しては、奥様からのご相談を受けて対応させて頂いている。ともかく、①蔵書を決して分散させない事と、②成書だけでなく、カタログやパンフレットなどの書類も大変貴重であり、これらも廃棄・分散させない事を、奥様にご理解頂いている。それらの受け皿について、地元、川口市の植木生産者等と協議しており、すでにほぼ全量をご自宅から搬出して、(株)小林ナーセリー(小林隆行社長)の社屋に一時保管している。現在、小林ナーセリーの職員が整理にあたっており、整理を終えた段階で、公益財団法人川口市緑化センターに移管される予定である。その他に、僅かではあるが、成書の一部は川口市立図書館に寄贈されている。これらの経緯は、柴道昭氏(昭和30年園芸別科卒)らが承知している。

植物は、奥様のお好みのものを除き、横井先生と奥様の意志によって、川口市の植木生産者に無償で譲渡されたため、ご自宅の周囲もすっかり片付いている。奥様は、お近くのママ友との交流も盛んで、お元気で過ごされている。(安藤敏夫)